



よく似る画帳・桂離宮（部分）



完成をまたずタウトは1938年逝去した

水原徳言宛 一九三八年八月八日

……親しい君よ、今どうしているのか。

私は日本、そしてその文化を思うと切ない悲しみを覚えるのだ。それは発展するのか、それとも止びてしまっているのか？

君の仕事が、井上さんの伝えてきたところによれば、彼と同様うまく進行している山、喜んでいようかよろしく伝えてもらいたい。それと共に「ハイカラ」について強く批判を保持するように頼む。

この地で私は、建築上は皮肉にも「キュービック」と呼ばれるもの、フランス語ではcubiqueというものに誠心、真剣に反対する。そうした考えを私は自分の建築様式の中でも、そして授業の中でも、試みているのだが、それは間もなくトルコ語で「建築論説」として出版されるはずだ。

芸術は永遠に、人間の感性に対する最も強い印象として残るものだ。それ故にこそ、それが人間の霊性において最も鋭い、そしてすべての邪悪に対する剣となるのだ。

ここでの私の仕事はすべて順調だとはいえない。しかしそれにしても、すべての自然は美しい。美しい船がボスポラス海峡に群がる。そして海豚は時折、遊びながら、飛びあがるのだ。私の大学のすぐ窓近くで。

ブルーノとエリカ

一九三八年八月八日

タウトとエリカが水原徳言氏に送った手紙



タウトはトルコに渡り精力的に仕事をこなし58歳で逝去し、エリは達磨寺にタウトのデスマスクを持ち帰った



令和4年4月 重要文化財旧日向別邸再公開記念展展 2021

ブルーノ タウトの軌跡

タウトと高崎

達磨寺 洗心亭 八幡村



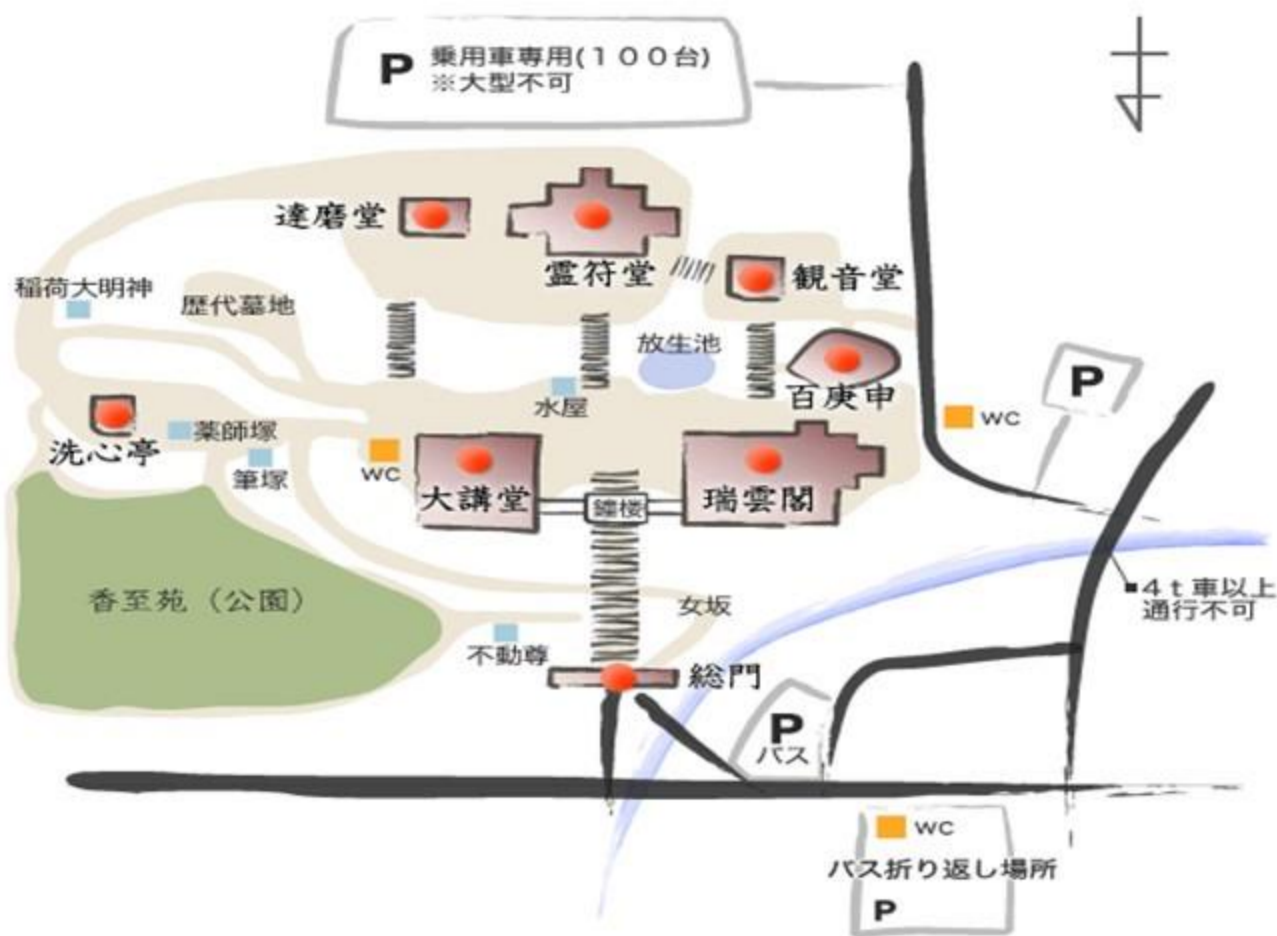


ブルーノ タウトはエリカと共に、井上房一郎の紹介で昭和9年8月1日より昭和11年10月8日までの2年3か月をここ「洗心亭」で過ごし活動しました。6畳+4.5畳の二間だけの作りでしたが、展望もよく こよなく愛したコリーの地とも共通することから、深い愛着をもって住み、地域の人々に「タウトさん」と呼ばれ交流しつつ活動しました。



山内図

●印の施設をクリックで詳細ページをご覧ください。



井上房一郎からタウトの洗心亭への居住依頼された廣瀬大蟲住職は、快諾し一家全員で大変よく面倒をみました。特に大蟲の次女廣瀬敏子は、毎日床の花を変えるなど、日常生活の面倒を見、離日時の見送りもしています。タウトとエリカは2年3か月後、トルコに移住したあとも交流しました。そしてタウトの死後、エリカは危険を冒しながらもタウトのデスマスクと遺品を少林山に持ち帰りました。二人にとっての少林山は、廣瀬一家を通しての日本の文化、こころの原点だったようです。



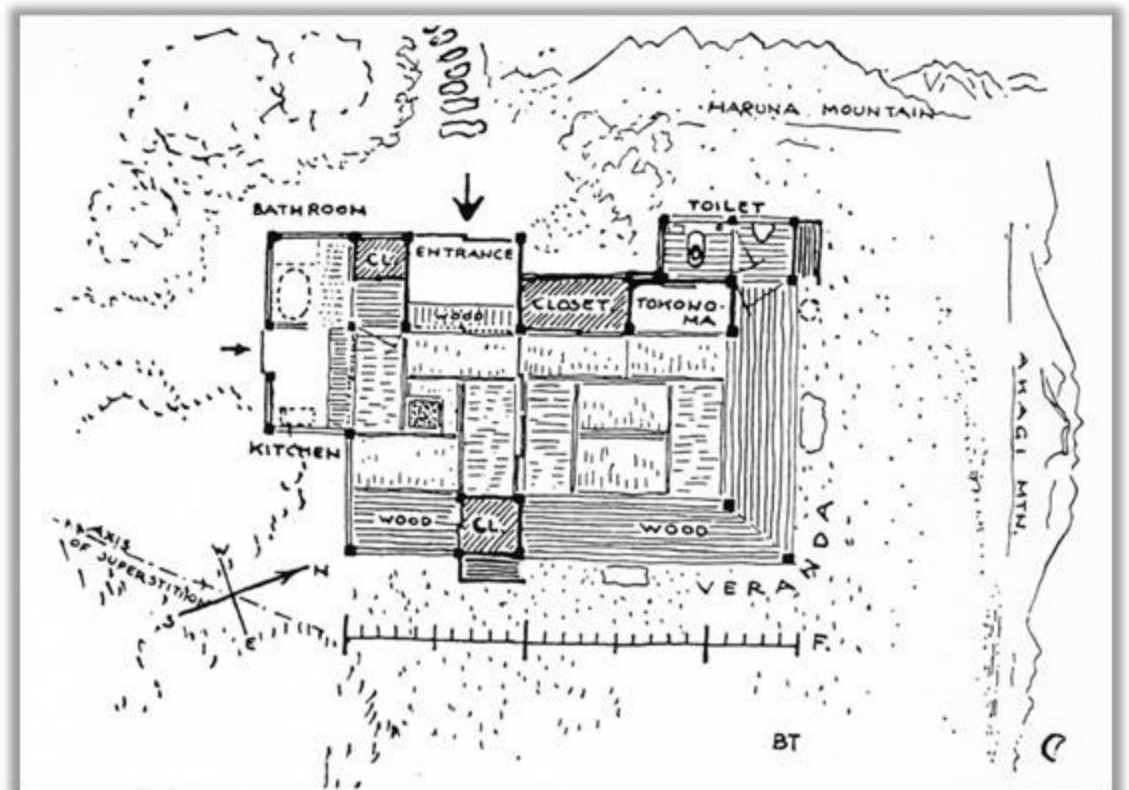
玄関



居間 (六畳)



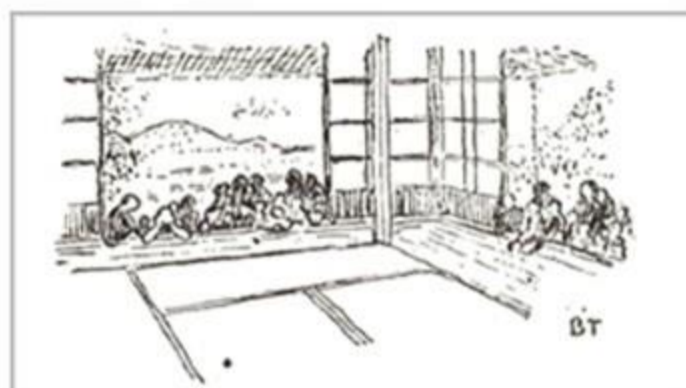
床の間とその裏側



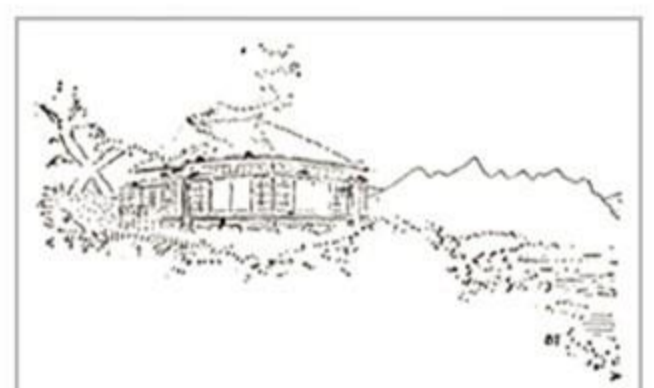
便所 (手洗器と手拭掛)



台所から湯殿を観る



縁側に集まった子供達



洗心亭と月夜の鼠



▲上：洗心亭

◀左：旧日向別邸和風客間。





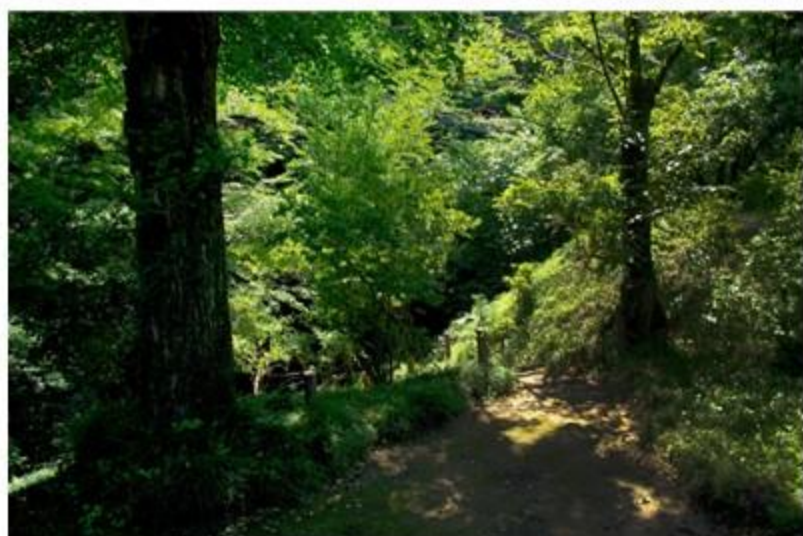
ICH LIEBE DIE JAPANISCHE KULTUR. Bruno Taut

我、日本文化を愛す 1934.8.24





タウトは毎日午後2～3時間散歩をしました。境内から周辺の小道を歩きながら様々なことを思惟（深く考える）したといえます。寺の門①から瑞雲閣⑩まで案内板がありタウトの散歩の足跡をたどることができます。





タウトと井上房一郎

高崎



ブルーノ・タウト 井上房一郎

「知のDNA 夢ひかる刻」より



日向が購入した行燈 蔵・旧日向別邸

井上房一郎は、生涯を通して文化支援を全うしました。群馬交響楽団、群馬音楽センター、群馬県立美術館の設立などに関わり高崎の文化の礎を創りました。ブルーノ・タウトは井上工芸研究所顧問として達磨寺洗心亭に居住し、房一郎の工芸運動に共鳴し工芸の産業化に尽力しました。昭和10年、銀座ミラテスを開店。作品は房一郎との共同製作を意味する「タウト・井上印」が押され国内外へと販売されました。「タウトさんという素晴らしい協力者なしには、私の工芸運動は成功しなかった」と房一郎は述べています。日向利兵衛も行燈を購入し、タウトとの出会いとなりました。



銀座ミラテス（タウト・内装設計）



タウト・井上印

仙台の工芸指導所で顧問を務めた後、タウトは1934～1936年まで、群馬県高崎市にある少林山達磨寺 境内の洗心亭に居住していました。その間、数々の家具や工芸品をデザインすることで、ドイツヴェルクブンド（工作連盟）の美学を伝えています。「緑の椅子」も、その中でデザインされた試作品のひとつです。タウトが求めたスレンダーな造形の実現は当時の技術では難しく、タウト自身による強度実験で折れた跡が現在でも残っています。



緑の椅子は達磨寺所蔵

天童木工により強度改良され復刻版が製品化されています。

緑の椅子リプロダクト研究会 島崎信 鈴木敏彦 浅水雄紀 西澤高男



井上房一郎の始めた工芸品制作活動に参加、タウトが高崎に滞在している間井上のもとタウトの様々な生活を支援し、工芸品制作支援を一貫して行いました。タウトは思いつくと水原氏に「こういうものができるか？」とデザイン画を見せ、タウトのデザインに合わせた職人を探し、仕事を依頼しました。タウトの水原氏への信頼は高いもので、タウトがデザインしたものは、水原氏が職人の力を集め制作することで、洗練された工芸品となってその多くが世に出されました。

高崎周辺町村の無名な手工業者により新しい工芸品として生産され、それらの製品は銀座ミラテス店で売られました。



2.26事件は離日の切欠事件となった

旧日向別邸が完成し「・・・いま私の仕事が、細部にいたるまで成功しているのを見て、非常に満足した。・・・全体として明快厳密で、・・・、すぐれた階調を示している」と成功している述べましたが、モダンでない和洋折衷の建築は不評でした。折しも勃発した2.26事件、「雪は降り積んだままである、少林山の雪景は白と黒の二色だ。ところが東京ではこれに赤が加わって、黒、白、赤の三色となった」と日記に記し4月1日まで筆を折りました。9月11日トルコより招聘があり、日本の「重苦しい空気はやりきれない」と離日を決意し、トルコへと旅立ち2年後の58歳で逝去しました。



達磨寺でのブルーノ・タウト送別会

タウトさん万歳！ 奥さん万歳！

八幡村万歳！ 少林山万歳！

タウトの作品は、高崎周辺町村の無名の手工業者の手により新しい工芸品として生産されました。それらの製品は井上の銀座ミラテス店で売られ、日向利兵衛など多くの人たちが買い求めました。高崎に貢献したタウトは昭和10年の少林山の節分会「年男」として豆まきをし地域の人たちとの交流も深めていました。昭和10年9月25日に碓氷川が大雨で氾濫を起こした時、タウトは八幡村に50円の義援金を出し災害復旧を支援しています。

昭和11年10月8日、少林山からトルコに出発するタウトを見送るため、八幡村の全村民が駆けつけました。村民のタウトさん万歳！ 奥さん万歳！の声に、タウトは 八幡村万歳！ 少林山万歳！と答えました。

